

コンラート・ローレンツ著  
日高敏隆訳

『ソロモンの指環』  
(早川書房)

広瀬 久美子著

『女の器量はことばしだい』  
(リヨン社)

ひぐちみちこ著

『かみさまからのおくりもの』  
(こぐま社)

村石 京子

ソロモンの指環 コンラート・ローレンツ著

一般的に言って訳本はとくに難解なことがあります。

どこの国の言葉にも、その国の独特な言いまわしや例文などがあるので、それを日本語に直したものはどこか文章不明な個所が時折出てくるため、私にとってどうも退屈な読み物と化してしまうことがあります。

K・ローレンツの「ソロモンの指環」は訳本の一つであり、しかも表題には――動物行動学入門――とある、一種の専門書です。

それなのに、こんなに楽しく読むことが出来るのは、一体何故なのだろうかと考えてみみました。

この本の中で印象に残っているところを二つ程あげてみたいと思います。

1 個の短い話が書かれていて、読みたいと思つたものどれからでも読んでいける。

2 さし絵がかわいらしく、しかもリアルである。

3 どれも身近にいる動物たちの話である。

全く動物好きの私にとっては、うんなるほど！

とうなずきながら読んでしまったのでした。

4 行動学に関する専門用語がほとんど使われていない、などなど。

こんなことが、この本が魅力ある本として人々に親しまれている要因かと思います。実際この本は、既に多くの人の心をとらえています。行動学に興味のある人は勿論のこと、鳥の好きな人、犬の好きな人、魚の好きな人などにとって、とても興味ある書物です。そして更に私は、人間学を学ぶ人にもっともっと読んでほしいと思うのです。なぜなら動物行動は、人間と著るしいかかわりがあるからなのです。

人はあらゆる動物と同じライン上にいるということ

は、実に人間くさいということです。しかし博士は、動物が人間に似ているのではなく、「どれほど多くの動物的な遺産が人間の中に残っているかをしめしている」と言つてゐるのです。

人間は独立した特別の生き物では決してないのです。ダーウィンの進化論でいえば、生物のおおもとは、三〇数億年前の海の中のもやもやした微生物であって、それが魚になり、あるものは陸にあがつて爬虫類となり、またあるものは鳥になつたり、猿になつたりしてきたと言われています。人間の胎児は、実にその三〇億年の進化を、母親のお腹の中にいる約二八〇日で遂げてしまうのです。ですから、胎児の脳の形はその発達の途上で、魚のそれであつたり、鳥や猿のものとそつくりなのだそうです。

を、私たちは時として忘れがちです。しかしもしも都会の雑踏をのがれて、自然の中に浸っていたら、進化の途中で忘れてきた何かを思い出せるのかもしれない……。そんなロマンがあつてもいいなどふと考えてしまうのでした。

もう一つは、これが私にとってこの本の吸引力であったのですが、私たちのまわりの愛すべき動物たちと、もつともっと仲よしになることの素晴らしさが描かれています。動物と人では、人と人のときとコミュニケーションケーション

### 女の器量はことばしだい 広瀬久美子

本屋さんで見つけると、思わず手を出してしまいうようなタイトルですね。

頁を開くとすぐ目に飛びこんでくる「広瀬さん、手術だよ」という書き出しは、著者の病院での体験にもとづいたものですが、多くの人は病院では大なり小なりの似たような体験があると思います。気性の大へんしつかりした（と私には思われるのですが）この方でさえ、お医

ンの方法がちがいます。動物は、人間同士のときよりも、もっと敏感に私たちの心をとらえていることが多くあります。この姿のちがう友人と心を交わす魅力は、私にとって本当に素晴らしいことなのです。そしてこの本を読んでから、家で飼っている犬をはじめとして、動物たちが以前にもまして愛すべき存在となりました。

この本を読まれた方は、きっと私と同じように、動物と一緒にいることが、もつともっと楽しくなることでしょう。

者さんの診断に一時は大へんなショックを受けたとのことです。でも万一を願つて他の病院を尋ね、そこで自分が信頼して自分の身体をあずけられる医師にめぐりあい、安心して診断を待られた体験が書いてあります。これは、この本の内容とは直接かかわらないにしても、身近な生活体験として何かとても参考になる話として、冒頭にふさわしく印象的でした。

サブタイトルとして——本音で生きたい——とあります。これは日頃私も願っていることなのです。本音で生きたい、本音で語りあいたいと思うのですが、人とのかかわりあいの難しさに頭をかかえてしまったり、自分の気持をうまく相手に伝えることが出来ないで落ちこんでしまったりすることがあります。本音とはいつたい何なのでしょうか。それは、決して自分の意志を押しつけるものではなく、相手の立場を尊重することを否定するものではありません。また、相手を思いやる優しさを失なつては、語りあつても何も生まれてはこないでしょう。

こちら側のもつている誠意、熱意、心情といったものを相手に伝えていくことなのです。これが相手を納得させ、説得していくものなのだと述べてあります。

「生きたことばを扱う職人」と、N H K のアナウンサーである廣瀬さんは自分の仕事柄を言っていますが、私などは、日頃児童のことばに関心があると言いつつも、自分自身ではいかに不用意にことばを使っているかとしみじみ思つてしまふのでした。人間関係をよくもわるくも

する鍵として、ことばは実に重要な役割をとつてゐるのに、ふだんはあまりにも身近にあるために、かえつてその大切さを忘れて使つていることが多いのですね。人と人とのかかわりあいを大事にしていきたいと願つていてのに、片方でぞんざいな言葉えらびや物言いをしている自分であることに、恥ずかしく思つたりもするのでした。

そして読みながら「本当にそうだわ」と多いに感じたり、あるいはふと「でも私は……」などと著者のアナウンサーという立場と、私のおかれている教師という立場の違いを思つたりして、何故かときどき読んでいる最中に、自分が出てくるのです。仕事は全く違うのですが、職業人という意識をもつた比較的年令も若い女性の著であるので、そんな読み方をしてしまつたのでしょうか。でも仕事は違つていても、「聞く勇気」「声をかける勇気」「薦めおしみをしない」などといつたことは、全く私の身のまわりでも多いことです。いろいろ考えたり、教えたりすることも多く、そして面白く読めたのです。

御紹介する気持になりました。

### かみさまからのおくりもの ひぐちみさこ

四才児クラスを担任していた一年間に、小さな家族のふえた子どもが三人程ありました。時折、赤ちゃんのことが話題に出ています。またもう少し年令の近い兄弟同士であっても、そのかかわりあいがいろいろと話題になります。そんな頃、この絵本を見つけましたので、クラスの子どもたちに読み聞かせました。

赤ちゃんが生まれるとき、神さまはひとりひとりの赤ちゃんに、とてもふさわしいおくりものを下さいます。それをはこんでくれるのは天使なのです。このおくりものがどんなに素敵だったかを教えてくれるのは、そこに描かれている楽しい絵です。兄弟のいる子もいな子も、みんなにこにこしながら聞いていました。そして可愛い絵を見ながら、胸の中でいろいろなことを想像していました。

みんなの前で読んだあと、本立てに立てておきました。

かわりあつて、この本をとり出してくり返し見て います。きっと子どもたちの心に、何か暖かいものを伝えてくれるからなのでしょう。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)